
オトコギライ

館里々子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オトコギリイ

【Nコード】

N9124A

【作者名】

館里々子

【あらすじ】

オトコギリイのあたし、こと芦田友海に、いきなり話しかけてきた男子がいた。メガネをかけてる割には遊び人ばいそいつ、じつはあたしのよく知っていた男子で……。あたしの親友・春華をも巻き込んだ、恋愛青春小説。（ジユブナイル向け）

1 事件起こした張本人

「ね、芦田さん。僕のこと覚えてる？」

突然話しかけてきたのは、こんがりと日に焼けた、爽やか眼鏡男子だった。

誰だ、こいつ？ 素早く胸の名札を見てみると、一年二組、小林とあった。

同じ学年で、クラスは隣。だけど目の前の眼鏡くんに、見覚えなんか全然なくて——もといすぐには思い出せなくて——あたしはとっさに一歩、いや多分三歩はあとずさった。

背中に下駄箱兼用ロッカーがぶち当たる。なのに小林某は、構わずあたしに詰め寄ってくる。いったいなんなのよ、あんた？ あたしは警戒をマックスにした。

「ええと、ごめん。……全然分らないんですけど」

案の定、小林某はちよつと傷ついた顔を見せた。

「そつか。……えーとね、僕、二組の小林文弥って言うんだけど、ホントに覚えてない？ 中学三年の時に同じクラスで、それから部活でも、一緒だったんだけど」

眼鏡の奥で苦笑を浮かべた瞳が、あたしを窺う。それより顔を近づけすぎだと思っんですけど。あたしが威嚇と牽制を込めた視線で見上げれば、彼はようやく気がついたのか、一歩下がって適正な距離をあけてくれた。あたしは思わずほっとする。

それにしてもこの人誰よ？ 元同級生で、部活でも一緒だった？ そういえばこの銀縁眼鏡、どこかで見たことがあるような……。

自称・元同級生の顔をまじまじと見つめて、あたしはあつと声を上げた。

「……小林文弥って、美術部の部室荒らされてぶち切れた、あの小

林くん？」

眼鏡くんはちよつと気まずそうな面持ちになって、うん、その小林です、と頷いた。

「やっぱり芦田さんも僕のこと、それしか覚えていないんだね……」
半年ぶりに再会した元クラスメートは、自嘲気味な苦笑いを浮かべたのだった。

元クラスメートで同じ美術部員だった人間の顔と名前、両方すぐに思い出せなかったのってどうよと自分でも思う。しかも相手はあの小林くんなのに。

でも、どうか非難する前に、落ち着いてあたしの言い分を聞いてほしい。だって今の小林くん、あたしの記憶の中の小林くんとは全然違っていたんだから。

それはもう別人みたいに。

あたしの知る小林くんは典型的なもやしっ子で、色白の華奢な体格、銀縁眼鏡の奥には翳りのある目つきを隠し、表情も乏しく、近寄りがたい雰囲気をまき散らし、そうして教室の片隅で、いつもひとりぼっちで読書——それも手にしていたのは画集か大人向け文芸書——をしているような少年だった。暗く陰気な少年のイメージ。

「なんか雰囲気変わったよね。高校デビューしたって感じ。その髪もイメチェン？」

思わず軽口を叩いてしまったのは、無理にでも和んだ空気を演出したかったからだ。

「——いや、特に考えてはいなかったんだけど。やっぱり短すぎたかな。ダサイ？」

短い前髪を引っ張りながら、そんなことを訊く小林くんには、やっぱり違和感ありまくりだった。第一ダサイなんて単語が、あの小林くんの口から出てくるなんて。

思い返せば中学時代、小林くんはお洒落なんて全然気にせず、漆黒の長い前髪を障壁にして自分の世界を築いていた。そのせいかク

ラスでも浮いていて、自分たちは流行の最先端を行っていると信じているグループからは、嘲笑と侮蔑の的にされていたのだ。

（あいつキモくない？）（性格暗いよね）（友達いないんじゃないの？）

だけど今の小林くんはあの頃と違って、翳りや暗さ、あるいは不屈の精神と言ったものが、一片たりとも感じられなかった。きっと表情が明るくなったせいだろう。

気の合う仲間と、太陽の下でバスケットや野球なんかを楽しんでいるのがお似合いな、日向のイメージ。薄暗い美術室で、気迫のこもった目をしてキャンバスと対峙する小林くんなんて、きっと昔の彼を知らなければ想像もできないだろう。

どうやら人間、変われば変わるものらしい。あたしは内心唸ってしまった。

不良どもを相手にブチ切れて、派手に暴れ回ったのは一年前。あれで何かを吹っ切ったのだろうか。昔の記憶を掘り返しても、やはり彼が自分から誰かに話しかける姿を見た覚えは、どこにもなかった。ましてや笑顔など——たとえそれが苦笑であっても——見た記憶はあたしにはない。なんて、考えればよく見ていたものだとも内心呆れつつ思い出す。

とにかくにも、性格が明るくなったのは良いことであるに違いない。しかしどういうわけか、あたしはひどく動揺していた。まさか彼が、こんなにも変わっているなんて。

——だってこれじゃあ、ただの軽薄な遊び人みたいじゃないか。

昔の小林くんの雰囲気を残すのは、よく似合う銀縁眼鏡、それだけなのだ。

「ううん、似合うよその髪型。それに日に焼けて、なんだかたくましくなったみたい」

すぐに思い出せなかった後ろめたさも手伝って、つい調子のいいことを言ってしまう。

でも彼はそんなあたしの動揺には気がついていないようで、嬉し

そうに笑って言った。

「うん、脱・虚弱体質を目指しているから。部活でもだいぶ、鍛えられたし」

「クラブって、何やってるの？」

中学時代、あたしは幽霊部員だったけど、にも関わらず彼の評判はよく耳に届いた。

いかにデッサンが上手で、筆遣いが巧みで、色遣いの品がよくて、アイデアが秀逸か。そしてどれほど熱心に、絵を描いていたか。それほど絵を描くことを、楽しんでいたか。

だから小林くんの答えを聞いて、あたしは一瞬呆けてしまった。

「それが実は色々あってさ。……空手部に入っちゃったんだよね」

「……は？ からって、まさかあの空手部？ ……小林くんが、瓦割ったりするの？」

「瓦は割らないけど、まあ、あの空手部だね、格闘技の。……そんなに意外？」

小林くんが、驚いたあたしの顔をのぞき込んで、くすりと笑う。

意外とか言う以前の問題だ。だってあたしの神経回路の中ではまだ、今日の前にいる小林くんと、あたしの知る昔の小林くんが、しっかりと結びついていないのだ。

どうやら変わったのは、外見だけじゃないらしい。とは言えそれにしても、あの小林くんが格闘技だなんて、とち狂ったとしか思えない。

そりゃあ昔、不良ども相手に乱闘騒ぎを起こしたことのある小林くん。それに今の小林くんは、爽やかな笑顔を振りまく少年で、でもでもやっぱり格闘技なんて似合わない気がしてなんと言つか、昔の彼を知っているあたしはどうしても、首を捻ってしまうのだ。

あの名付けるならば『部室荒らされて小林くんぶち切れ事件』とでも呼ぶべき出来事から早一年、人間変われば変わるものだとは、ついさっき思ったところ、しかしいくらなんでも、ちょっと変わり過ぎではあるまいか？ ……本当にこの人、あの小林文弥？

華奢で生真面目で寡黙で表情に翳りのあった、あの小林文弥なの？
「意外って言うか、その……絵の方はまだ、描いているんだよね？」

恐る恐る聞いてみる。高校でも美術部に入部したくせに、やっぱり幽霊部員しているあたしが聞くのも妙だけど、でも気になった。彼は現在確かに、美術部員ではない。それでも本当に絵が好きなら、やはり描き続けているはずだと思ったのだ。

「——あ、いや。それが全然。……しばらく辞めていたんだよね、描くの」

あたしから視線を外して俯いて、口元だけで薄く笑って。訊かれたから、仕方ないから答えるけど、みたいな言い洩るような口調だった。あたしは考える前に尋ねていた。

「どうして？ あの時あんなに怒っていたのに。マジ切れして、手がつけられないくらいに大暴れしたんでしょ？ あれは自分の作品を台無しにされたからじゃ、なかったの？」

約一年前、小林くんが部室で泣いているのを見たのは、何もかも終わったあとだった。

部屋の窓が割られ、石膏でできた胸像が壊されていた。床一面に画材道具がぶちまけられ、絵の具のチューブが踏みにじられ、描きかけのキャンバスにはナイフで斬りつけられた傷が何本も走っていた。煙草の吸い殻が転がっていて、それを押しつけた跡もあった。荒らすために荒らしたのだろう部室に、部員たちは声を失ったものだった。

美術準備室——そこは作品の保管室でもあった——が荒らされたこと知って、だけど幽霊部員だからと割り切ることができたあたしは、薄情にもさっさと一人、帰宅してしまったのだった。だから小林くんがその後、犯人——正確には重要参考人であって犯人とは断言できない学校の鼻つまみども——たちと乱闘騒ぎを起こしたのは、あとで知った。

小林くんが彼らに目を付けられ、たびたび嫌がらせされていたと

いうことも。

——いじめられっ子が牙を剥いたのだ。窮鼠猫を噛むのことわざ通りに。

だがみんながそう言って、その意外性ある事件を「こんなこともあるさ」と日常レベルに溶かし込んでいく中で、あたしはその事件だけは、なかなか忘れることができなかった。

そのせいだろうか。あとから話を聞いて想像するしかなかったあたしには、小林くんが大暴れした事件周辺の話よりも、制服の袖で涙をぬぐう姿の方が、うんと思いつく深いのだ。

美術準備室の、絵の具やニスの臭いが混ざり合った独特の空気。窓辺から忍び込む夕陽。運動場から聞こえる部活に励む学生の声。右腕にギブスをして、立ちすくむ少年。

同時に思い出すのは、男の子が泣いているのを見てしまった罪悪感だ。だったら早く立ち去ればよかったものを、あたしは少年の背中から目が離せなくなっていた。足元に落とす影の、黒々とした何かが床に染みわたっていくのを、食い入るように見つめていた。

あの事件で、小林くんはどれほどのものを失ったのだろう。描きかけの絵が台無しにされただけじゃない。彼は利き腕の骨を折られたのだ。多勢に無勢、体格の差、喧嘩慣れの有無。そもそも小林くんが喧嘩して、勝てる相手ではなかったのだ。

しかし乱闘騒ぎで得たものもあつたはずだ。卒業するまでの間、小林くんが誰からもバカにされたりしなくなった。それはあたしにとつてもまた、「得たもの」だった。

だってあたしは親友の春華と一緒に、彼に恩義を感じていたから。それもこれも、彼はあの時、取り巻きを見捨ててリーダー格の少年の仁宮だけを狙って反撃したらしく、彼の鼻の骨と前歯を二本、折ったからだ。窮鼠猫を噛む。ざまあみる。他の身に覚えのある同級生も、それで小林くんに恐れをなしたに違いない。

だけど、聴衆や侮蔑の言葉を遠ざけることに成功した代わりに、小林くんを訪れたのは孤独だった。個人的に親しくしていなかった

から記憶も曖昧なのだけど、最後まで小林くんに友達ができた様子はなかったのだ。

しかもその上——その事件直後、小林くんは美術部を退部してしまったのだ。

それは責任を取って退部というよりも、时期的なものなせいで、当時のあたしは思ったものだ。文化祭直前のことでしかも受験生、文化祭が終われば引退を余儀なくされるのは定石だ。だから右腕を使えなくなった小林くんが、みんなより一足お先に引退を表明しても別に奇妙だと感じなかった。居づらくなったのかな、と邪推した程度だった。

そもそも部室荒らしの犯人が奴らであるという、確たる証拠が見つからなかったのだから、たとえどんなに奴らの嫌疑が濃く、奴らが他でも様々な悪事を働き、あるいは人に嫌がらせなどをしていていたとしても、ただの喧嘩と見なさざるを得なかったのだ。

学校側——美術部の顧問や担任教師、それから同じく被害を被った部員たちさえも。

悔しいのは作品をダメにされたこと、だから部室で一人、彼は泣いていたのだろうと思ったのだ。それを疑う理由なんか、当時のあたしには思いつかなかったのだ。

——それだから、まさか小林くんが絵筆を折ってしまっていたとは、思わなかった。

驚愕の事実。いったいどうして？ どうして今まで辞めていたのよ？

「まあね、さすがに僕だって、自分の作品台無しにされたら腹が立つよ。だからあの時は大暴れしたんだけど。……でも、そろそろ立ち直ってもいい頃だろうと思ってさ」

小林くんが、よく分からない言い回しをして、あたしの顔を窺うように言った。

「……もし、空手部と掛け持ちで入部したら、嫌がられたりしない

かな？」

「どうやら彼は美術部に入りたくて、あたしに声をかけてきたらしい。なんだ。あたしは肩の力を抜いた。いきなり変なことを訊いてくるから、変に驚いてしまったじゃないか。」

小林くんの言いたいことが分かった途端、何故だか急に恥ずかしくなって（なんで恥ずかしくなるんだ、その方がおかしいじゃないか！）あたしは素っ気なく言った。

「いいんじゃない、と言うか幽霊部員より全然いいよ。入りなよ美術部。絵が好きなら遠慮せずにさ。あたし、小林くんの描いた絵、評判よかったの知ってるし。それよりなんで今まで我慢してたの？ そんなの気にしないで、さっさと入部すれば良かったのに」

あたしは美術部員だけど幽霊部員で、だからただの平部員と自称するのもはばかれる立場で、だから掛け持ちしていいかどうかなんて本当は分からない。何も言えない。

「ただどあたしはあの事件で、小林くんに義理があるのだ。とは言っても、小林くんには与り知らぬ事なのだが。それを今になって思い出して、あたしは彼が絵を書くのを辞めていたことに申し訳なく思い、そして同時に恩を返そうと決めていた。この場で。」

「本当にいいの、掛け持ちしても？　じゃあ明日にでも、入部届け出そうかな」

小林くんは嬉しそうな笑顔を見せた。そして自分のロッカーに手を乗せて、そのまま考え込むようにして固まってしまった。笑顔まで引っ込めて。

「……どうしたの？　別に気を遣うことなんて、ないと思うけど」「——いや、そうじゃなくて。……ちょっと、どうしようかと思つて……」

わけの分らないことをモゴモゴ呟く。変な感じだと思っていたら、何やら横顔に盗み見るような視線を感じて、もう一度あたしは彼に、どうしたの、を繰り返した。

「うん、その……。芦田さんは幽霊部員だから、こんな頼みはどう

かと思うんだけど」

「何？ まだ、何かあるの？」

慎重に尋ねれば、小林くんははにかむような笑顔で言った。

「美術部の勝手ってよく分からないし、知り合いもないから、色々教えてくれる人がいたらなって思っで。……しばらく僕に、付き合ってもらえないかな？」

彼が言わんとする意味を掴みかねて、あたしはマヌケ面を晒してしまった。付き合っで、どういうことよ？ 何をするのに、あたしに付き合えっで？

「——付き合っで……つまり、部活に？ 美術部に入部するのに？」

「両方かな。ついでに——デッサンの練習台になってくれたら、嬉しいんだけどな」

小林くんは、さらりと凄いを言っでくれる。あたしは目を剥いて驚いた。

「練習台っで、あたしにモデルになれっで言うの？ 冗談！ やだよ恥ずかしい！」

即答で拒否。モデルなんて絶対やだ。確かに義理はあるけど、そんなの無理だ。

だがその義理を知らないはずの小林くんは、くつくつと笑っで言っで。

「……どうしてそんなに嫌がるかなあ。まさかきみに、裸になれなんて言わないよ」

「あ、当たり前でしょ！ 裸なんて冗談じゃないわよ。ビックリさせないでよ！」

赤面するあたしを見る小林くんは楽しそうで、まるで女の子の嫌がるのを見て喜んでいる、小学生の男の子のようだ。あたしは恥ずかしさのあまりに頬が熱くなるのを感じ、それを自覚して、今度は嫌悪感の波に襲われた。バカね、本気にしてどうするのよ。

あたしはコンプレックスの塊なのだ。自分の顔も髪も手も足も大

嫌いで、そんな自分が紙に描き出されるなんておぞましいとは思えない。醜悪だ。悪趣味もいいところだ。

こんな醜い自分を、モデルにしたい奴なんているはずがないんだから。

ところが小林くんは一転、態度を改め両手をあわせて、神さまお願いポーズになった。

「頼むよ。イスに座っているだけでいいから。誰にも描いたやつ見せないし。それに芦田さんだって美術部員でしょ、たまには部活動に参加しないと。……ね？」

今度こそあたしは啞然としてしまった。……本当に本気なの？

信じられない。あたしにモデルを頼む趣味の悪さも、それを頼むのがあの小林くんということも。

昔の小林くんは寡黙で、話しかけても必要最低限の返事しか返ってこなくて、笑ったりはしやいだりなんて見たこともなくて。——それとも、あたしが知らないだけでこつちが本性、実は小林くんは臆面もない人だったりするのだろうか。よく、分からない。

ただ、今のあたしと言えるのは、こんな小林くんを知らなかったということだ。

「……分かった」あたしの声に、小林くんがぱつと顔を上げた。

「いいよ、付き合ってあげても。——その代わりモデル代、払ってもらえるのよね？」

確認のための問い。拒絶代わりの交換条件。意地悪くあたしは笑う。たとえ練習のためでも嫌なものは嫌なのだ。だって顔とか足とかじろじろと見つめられるなんて。

もちろんこれが自意識過剰で、あたしが気にしすぎるだけなのは分かっている。——そう、理屈では分かっているのだ。理屈では。それでもやつぱり、どうせモデルを頼むなら、あたしの親友の川瀬春華みたいな子にすべきだと思うのだ。

色白でお目々ぱっちり、笑顔の可愛い彼女なら文句なしだ。

それに昔のこともある。……本当はそれ、春華にお願いしたいん

じゃないの？

ところがあたしの策略を軽く無視して、小林くんはやんわりと笑って言った。

「そうだね。お礼ぐらいはするよ。あんまりたくさん出せないけど……希望はある？」

予想しなかった展開に、あたしは二の句が継げなかった。まさか本気？ お金を出してまで？ 真意を探ろうと彼の目をのぞき込んだが、にっこり笑う目に揺らぎはなかった。

あたしが答えられずにいると、彼が言った。

「普通はアルバイトで雇うものなんだよね、モデルって。でも僕のお小遣いじゃ一日で終わってしまうから、一回いくらでどうかな？例えば、その日の昼飯代とか」

「……あ、うん。……それでもいいよ」

茫然自失。気がついたときには、そう返事をしていた。

もお、あたしのバカバカバカっ！　なんでそんな簡単に引き受けてしまうんだ！？

だけど、グズグズ駄々をこねるのもみつともないし、なんて、こんな時に限って見栄っ張りな部分が頭をもたげたりして、何を見栄張ってるんだよあたしはいつたい！？

あたしの混乱をまるで知らずに、小林くんは破顔して喜んだ。眼鏡の奥で、目が細くなる。ああ、小林くんの笑顔を見るのも初めてだったんだな、と今さら気づく。

昔は表情も暗くって、いつも教室の片隅で仏頂面していたのに。それ以外の表情は、部室で泣いているところしか見たことがなかったのに。ホントこの人、明るくなった。

「——それじゃあ、明日からお願いするね。明日——昼休みに。入部届出しに行きたいんだ。ちゃんと体空けといってね。ランチ代ならその時渡すから。よろしく」

釘を刺すのも忘れず、小林くんは走り去っていく。今日は空手部の日なのだそう。

彼の背中を見送って安堵して、そしたら急に気になったことがあった。どうして彼が声をかけたのが幽霊部員のあたしで、しかもあたしにモデルを頼んだりしたのだろう。

同じ中学出身で、とりあえず美術部に籍を置く知り合いだから？ だけどうして彼、あたしが美術部員だってことを知っていたのだろうか？

もちろん調べるのは簡単だ。名簿を見れば一目瞭然だし、あるいは誰か知り合いから聞いたのかも知れない。昔と違って今はきつとそれなりに、友人だっているだろうし。

でもあたしは幽霊部員で活動なんてほとんどしていないし、そもそも美術部に友人がいるのなら、あたしに付き合うよう頼む必要もないはずなのだ。

……なんか変だ。これはちょっとものすごく、奇妙な感触がする。嫌だ。なんだか気分が悪い。小林くんとは明日も会うのだ。なのに思考があさつての方向に流れてしまつて非常に困った。まさかまさかそんなこと、あり得ないって。

けどあたしの困惑とは裏腹に、様々な疑惑が浮かんでは消えていく。あたしは頭を振って靴を履き替えた。あたしの義理、あたしたちの恩義。それに関係があるのだろうか。

2 思い込みと勘違いと

「——で、何？ 今度はあたしに、防波堤になれとでも？」

翌日。あたしの幼少時代からの大の親友、川瀬春華が心底嫌そうな顔で言う。

否、嫌そうな顔は表面だけで、内心では面白がっているようだ。春華はまじまじとあたしを見つめて目を逸らさない。目は正直だね、興味津々という目つきだよ。

「や。て言うかできれば……あたしの代わりに、モデルをしてあげてほしいなアと」

あたしがお願いと頭を下げると、彼女は、なんであたしが、と渋面を作った。

「嫌よそんなの。だいたい、小林くんが頼んだのはアンタでしょ。あたしじゃない。それをどうしてあたしが行かなくちゃいけないのよ？ それに友海、ランチを奢ってもらう約束までしたんでしょ？ そこまでしておいて逃げようなんて、ちよつと卑怯よ」

親友はピシヤリと言い放つ。チクシヨウ、少しは考えてくれてもいいじゃんかよ。

春華はある意味、あたしより男嫌いだ。『ある意味』なのは厳選するからだけど、選ぶ余裕のあるのが小憎いところ。まあ、それだけモテるってことなただけだね。

「それはそうなんだけどさア……。ねえ、どうしてもダメ？」

「ダメ。そもそもあたしが行くのって変じゃない。諦めて行つてあげなよ。ね？」

春華はにつこり笑顔で言ってくれる。……。やっぱりだめか。

あたしはすっかり落胆して、机に頭から突つ伏した。勝手にあたしの前の席を占領している春華は、笑窪を作つてクスクスと笑った。鈴を転がすような笑い声。

「どうしてそんなに嫌がるの？ せつかく春が来たんだから、相手のことをよく知ろうとは思わないわけ？ いい感じになってたんでしょ、あの小林くんが。何が不満なの？」

「不満？ もちろんあたしをモデルに、つてところがよ」

「だからそれがどうして？ べつに良いじゃない。ちよつと回りくどいやり方だけど、好きな人をスケッチしたいなんてさ、奥ゆかしくてそういうの好きよ、あたし」

うつとりと春華は言う。いかん、全然話が噛み合っていないようだ。溜め息が出る。

「……あのね、言つとくけど、別にあんたの趣味なんか聞いてないし、そもそもあたし、小林くんから告白されたわけじゃないんだからね。勝手にそういう方向に話を持っていかないように。あたしは

ね、なんであいつが、わざわざあたしにモデルを頼むのかが分からないって話をしているのよ。もう、ふざけてないで、ちよつとは真剣に考えてよね」

「えっ、何それ？　そういう方向の話じゃなかったの？」

人が本気で悩んでいるというのに、春華は今さら、驚いた顔をする。べたな演技をしおってからに。なんでこいつは、こんな他人事のような顔をしていられるんだ？

「違います。……もう、勘弁してよ。あたしが男嫌いなの、知ってるでしょう？」

「そりゃあ、もう。あたしを見てくれに騙されて寄ってきた野郎どもを追い払うの、友海はよく手伝ってくれたもんね。……だけどいい加減心配だよ。何だか責任感じちゃうな。友海を男嫌いにしたのって、あたしが男運のないせいなの？　でもねえ、いつまでもそんなんじや嫁のもらい手がなくなっちゃうぞ？　ちよつとはりハビリに行ってきなよ」

あたしのほっぺをつんつん突きながら春華が言う。ええい、止めれつ。あたしは春華とは違うんだ。この呪われたDNAを、子どもに引き継がせる気はないんだよ。

確かに春華には男運がない。その最高潮は中学3年生の時だった。あたしは春華を守る防波堤、あの時は相手から、散々邪魔者扱いされて罵られたものだった。ブスとか不細工とかいろいろね。でもそれとこれとは無関係だ。春華が気にすることではない。

しょうもないコンプレックスと自覚しつつ、あたしはそっぽを向いて宣言する。

「……いいよ別に。お嫁になんか行かないから」

「またまた、そんなこと言っちゃって。せつかくのチャンスなのに、もったいない」

「ホントにそう思うなら、あんたに熨しつけてくれてやるわよ！」

どんと机を叩いて言えば、春華は目を丸くしてあたしを見つめる。ああもう、ホントに腹が立つ。どうして昨日のことが、あたしの色

恋沙汰になるんだよ!?

何度だって言ってる。あたしはオトコが大嫌いなのだ。だから恋愛は言うに及ばず。

もちろんそれは、あたしの容姿コンプレックスに由来している。

世間では、たで食う虫も好き好きだという。人間見た目じゃないと言う。だけどそれなら見た目も中身もピカーな人間には、あたしは一生かないっこないことになる。もちろん一番になる必要がないことくらい分かっている。凡庸で充分、十人並で何が悪い? そうだよ、別に悪いことは何もない。だけど自分の顔を好きじゃないってこととそれとは、まるで次元が違うのだ。あたしは自分の顔が好きじゃない。大きな鼻も小さな瞳も薄い唇もはれぼったい顔も、どのパーツもみんな、故意に神さまが手抜きをして作ったとしか思えない。でなければ芦田家のDNAが呪われているに違いない。きつと世の男どもはあたしを見て醜いと思うに違いなく、こんな醜い自分を好きになる相手のことを、あたしは悪趣味でおぞましいとは思えない。だからあたしは男嫌いで、きつと恋愛も一生できない。

あるいは——恋愛対象になる種族全てを嫌いになることで、自分への反応を見なくていいようにしているだけかもしれない。醜い自分を思い知らされることのないように。

なんて卑屈な自己防衛だ。我ながら根性がねじ曲がっている。しかも自覚があるから手に負えない。開き直った者の勝ちだなんて。せめて——とあたしは春華の横顔を盗み見る。艶のある髪に長い睫毛。白いもち肌には産毛がそよいでいて、それは見事な毛穴レス。もしあたしが、彼女の10分の一でも綺麗な顔立ちをしていたら、あたしの人生もっと明るくなったりしたのだろうか。

美術部の名簿を眺めながら、あたしは考えるだけ無益なことを考える。

現在平和なランチタイム。地獄のようなパン争奪戦をぐり抜け、あたしは親友を引きずって美術室にやって来た。というのも約束通

り、小林くんの入部届を出すのに付き合っただけで、ランチ代を奢ってもらったためである。だけど肝心の小林くんが現れなくてあたたしたちは待ちぼうけ。それであまりに暇だったので、隣の美術準備室に行つて、美術部全員分の名前がのつた名簿を見つけ出して、つらつら眺めているのだが――。

「……まだちゃんと残ってた？ 友海の名前」

足をぶらぶらさせながら、春華がジューズ片手に尋ねてくる。頑強に嫌がる春華をここまで連れて来たのは単純に腕力の賜物、あたしが強制連行してきたのである。

あたしはコツクリと頷いた。幽霊部員なのに、まだあたしの籍は残っていた。しかも名簿は誰でも手に取れる場所に置かれていた。さらによく見ると、小林文弥と同じクラスに美術部員のいることが判明した。名前からして女子、それが二名。だからどうと言うことでもないのだけど、なんとなく落ち着かなかった。

……いや待て。だから何を考えているんだよ、あたしは？

もやもやした頭で名簿を眺めていたら、いきなり目の前にペンを差し出されて顔を上げた。視線の先には美少女然とした親友。パンを頬ばりながら春華は言う。

「先に名前、書いてあげたら？ それに書いたら、入部届け完了なんでしょう？」

あたしはつい眉をひそめた。教えるまでもない簡単な入部方法。それで済むなら、なんであたしは呼び出されたのか。あえて考えないようにしていた疑問が浮上する。

……なんか凄いヤだ。男に呼び出されて待つという、このシチュエーション。

それにまだ、解明されていない大きな疑問が、宙に浮いたままなの。

どうして彼が、幽霊部員であるあたしが美術部に属していると知っていたのか。またどうしてそれを知り得たか。――もちろん名簿を見たからに違いない。確定だ。

問題は、そこにどんな他意が含まれているのか、と言うことなのだ。

「……そうだね。別に本人が書かないといけないうって決まりはないもんね」

雑念を振り払って彼の名前を書き込んでいると、春華が感心する口振りで言った。

「へえ、友海つてば小林くんの名前、書けるんだ？」

何気ない一言。けどあたしは焦ってしまった。おかげで手元が狂ってしまった。

「そりゃあ、元クラスメートだもん。昨日まで忘れていたけど、思い出したのよ」

「でもあんまり親しくなかったんでしょ？　なのに下の漢字まで覚えてるの？」

春華の指が、文弥の字を指し示す。……どうしてそんなの気にするのよ。

「それはだってほら。あの乱闘騒ぎ起こした小林くんだもん。名前だけは有名でしょ。しかも何度も言うけど、あたしは半年前まで同じクラスだったんだからね」

ちよつと言いつ訳がましかつたかな。春華の顔色を窺うと、親友はふうんと頷き、面白くなさそうな顔で、それもそうね、と呟いた。

「……あの乱闘騒ぎは、あたしたちにとっても、忘れられない事件だもんねえ」

感慨深く頷いて、春華は遠い目をして考え込むふうにする。一年前の追いつめられていた頃を思い出したのだろうか、人形のような横顔が首を傾げた。

「彼にはあたしからも、一言お礼を言っておいた方がいいのかなア……」

お礼。もちろんそれは、例の件——あたしたちの義理のことを言っているのだ。

例の件。それは簡潔に言えば、あたしよりも春華と、そして件の美術室荒らしの犯人と目され小林くんに鼻の骨を折られた最低野郎との、面倒な関係にあった。

つまり彼——仁宮は、身の程もわきまえず春華に目を付け、中学時代、何かと春華にちょっかいを出しに来たのだ。もちろん完全な片思い。はつきり言えばストーリーカーだ。

春華は友人のあたしが言うのもナンだけど、そんじょそらのアイドルなんかに引けを取らないくらい可愛いらしい。しかも華がある。目立つ。そうすると呼んでもないのに男が寄ってくるようなのだ。さながら甘い蜜の香りに誘われた、昆虫みたいに。

——で、あたしは親友として、春華のピンチに幾度となく駆けつけて、ことごとく妨害してやったわけだ。でも奴らからすれば当然あたしはお邪魔虫以外の何者でもない。だからあたしは蛇蝎のように嫌われていた。

「このブス！ お前なんか呼んでねえよ、引っ込んでろよ！」

「そう心配するなよ、誰もお前なんかに手を出したりしないって」

「俺は美人にしか用はねえんだよ。……なあお前さ、鏡見たことあるのかよ？」

忌々しい。なんて暴言の数々だ。思い出しただけでも血管がぶち切れそうだ。

この経験が、あたしにコンプレックスを植え付けたって？ まさか！ しつこく繰り返すが、あたしのコンプレックスはもつと以前から芽生えていたのだ。だけど確かに酷かった。春華があたしの男嫌いを自分のせいかと勘違いするのも、納得できなくもない。

とにかく、仁宮のやり口はえげつなかった。待ち伏せなんて当たり前、春華の話では自宅に脅迫まがいの電話をかけられたことが、一度や二度ではないらしい。14、5歳にして仁宮は立派なストーリーカー。しかも奴は学校でも有名な不良少年で暴走族とも付き合いがあったらしい。いっそ警察に相談しようかと、両親と話し合ったこともあった。

しかし結局あたしたちは、警察には相談しなかった。相談する前に、どういうわけか嫌がらせが途絶えたからだ。

その原因が何なのかは、未だはつきりとは分らない。だが仁宮が手を引いたのは、あの小林くんの乱闘事件以降であることは、どう足掻いても事実なのだ。

だからあたしたちはどうしても、その関連性を疑ってしまうし、それが遠因なのではと思えばこそ、どうしても小林くに恩義を感じざるを得ないのだ。

部室が荒らされた一件は警察にも通報されていた。もちろん奴は自供しなかったし証拠もなかったから、何のお咎めも受けていない。だが他の悪事が明らかになり、警察からも目を付けられたことで、彼の牙を抜くことに成功したのではと考えたのだ。

「でもさ、お礼って言うけど、何て言うつもりよ？ 仁宮にナイスな仕返ししてくれてありがとう、おかげであたしたちも助かりましたって？ こっちの事情、何にも知らないでやったのかも知れないの？ そもそもどう関係しているのかも分からないの？」

小林文弥が仁宮たちと喧嘩したのは、部室——正確には美術準備室——を荒らされ自分たちの描きかけの作品をめちゃくちやにされたからだ。日頃から嫌がらせもされていたらしいから、堪忍袋の緒が切れたのだろう。——あたしはそう、確信している。

だが春華の見解はまるで違っていた。否、もしかしたらあたしの想像するのと同じなのかも知れない。だが口に出さないのは、それがあまりに野暮だからだ。

「ウソ嘘、そんなこと思ってもないくせに。あの時だって、不思議よねって散々話し合ったじゃない。結局小林くんとあいつらの間に何があったのかは、全然分からなかったけど。でも実はあたしたちが睨んだ通り、何か裏があったのかもって思わない？」

「——裏って何よ？」聞かずもがなを聞くあたしは、きつとバカだ。春華は含みのある視線を寄こして、悪女みたいに楽しそうに笑っ

て言った。

「だーから、それは聞いてからの楽しみでしょう?」

3 本命は誰?

「あれ? 川瀬さんも一緒なの?」

小林くんはあたしたちを見るなり、開口一番そう言った。

「ごめんね、ついて来ちゃった。……久しぶりだね、小林くん?」

春華は上目づかいでにつこり笑う。天然の男殺し。これで本人は媚びを売ってるつもりがないのだから恐ろしい。こんな風だから、あんなのまで引っかけてしまうんだろうと、あたしは胸の内で溜め息を吐く。美人すぎるのも考えもの、ということだ。

一方小林くんはちよつと驚いた様子で、そうですね、と頷いてみせた。はにかむような、ぎこちない笑み。それからどう対応したらいいのか分からないのか、沈黙してしまう。

あたしはなんだか落ち着かなかった。とにかくやるべき事を済ませて、お邪魔虫は早々に退散しましょう。そう腹を括って彼に名簿を渡しながら、入部手続きがすでに終えたことを報告する。あとは顧問に連絡するだけで全て終了。

美術部は超が付く個人主義だから、他に教えることなんてほとんどなかった。あるとすれば週間カレンダーに使う記号——展覧会、絵の先生やOBの来られる日、コンクールの締め切りなど——くらいのものだ。だから説明は3分で事足りた。そして説明が終わると当然、美術室には沈黙が降ってきた。それも最上級の居心地の悪い沈黙だ。

あたしとしては、今日の部活にも付き合う必要があるのか聞いて、その分のランチ代をドライに受け取って、これにて頼まれ事終了、解散! としたいのだけど、妙にそれを言い出せない雰囲気があった。たぶん春華のせいだ。彼女が話をする気満々だからだ。

「……用事は終わった? なら、少し話をしてもいいかな?」

春華が腰かけていた机から飛び降りた。あたしはそれを横目で見
る。あの事件に裏なんて、本当にあるんだろうか。あっちこっち
で起きたことは互いに無関係じゃないのか。

——土壇場になってそう思えてきた。

だったら、あたしらが考えていることは大ハズレ、赤っ恥をかく
だけなのに。

でも春華はそう思っていないようだ。なんて自信家。だってほ
ら、春華の目が爛々と輝いている。彼女は自分が無関係な色恋沙汰
に限って、そういう話が大好きなのだ。相手があたしでも、多分そ
れは変わらないだろう。——このバカ女。

どうして分かんないのよ。この場で彼に聞き出すのは無理がある
し、大体そんなの酷いじゃないか。だってねえ、小林くんの大本命
は春華、あんたかも知れないんだよ？

「……話つて、僕に？ 川瀬さんが？」

小林くんはあたしと春華の顔を見比べて困惑顔。微笑して頷いた
のは春華だった。

「うん。去年のほら、小林くんが腕の骨を折られたあの事件。あれ
についてあたし、ずっとお礼が言いたかったのよね。いい機会だか
ら、あなたに言っておこうと思ったの」

「……お礼つて、どうして？ ……それつて、どういうこと？」

慎重な声。その瞬間、はつきり小林くんの顔に浮かんだのは——
狼狽だった。

あたしは驚いた。困惑でも、虚をつかれた顔でもなく、狼狽。そ
れつてたとえばドラマなんかで、何か知られてはまずいことを指摘
されたときに、浮かべるものじゃない！

この事件には裏がある。推理小説の決まり文句ではないけど、い
きなり言葉に重みが増したようだった。あの乱闘騒ぎと春華への嫌
がらせの絶息は、無関係ではなかったの？

春華は、仁宮に嫌がらせをされていたことを話し出した。そのや
り口がどれだけ酷く、どれだけ精神的に参っていたか。そしてそれ

がある日唐突に終わり、それが例の乱闘騒ぎを境にしてだったことを。

「——だから、小林くんには感謝してるの。あのしつこい仁宮を大人しくさせてくれたおかげで、あたしもやっと解放されたから。ホント、その節は助かりました」

「……へええ。あいつ、そんなことまでしていたんだ。知らなかったな」

話の流れが見えてないのか、苦笑いを浮かべる小林くんに、春華は一步詰め寄った。

「……本当に、知らなかったの？」 彼を見上げる春華の目は、笑ってはいなかった。犯人を問いつめる探偵の目、しかも怒りを湛えている。

「……なんで？ どうして怒る必要があるの？ たぶん小林くんもわけが分からないでいるんだろうけど、あたしだって困惑した。感謝の気持ちはどうしたのよ？」

ふいに小林くんの視線があたしを捉えた。とまどいながら、何かを問いかける目。

何なのよ、いったい？　なんでそんな目をするのよ？

「……何も言わないなら、あたしから言うけど。仁宮って、もの凄い勘違い野郎で、かつもの凄い嫉妬深かったのよね。だからあたしと仲良くする男子、全部敵視していたの。それで……よく聞いてよ、あなた友海と同じクラスだったでしょ。だから友海とも会話ぐらいするし、当然あたしとも口をきくことだってあったじゃない？　て言うかあったのよ、覚えてないかも知れないけど。——で、あの乱闘事件よ。あの喧嘩って美術室が荒らされたのが理由らしいけど、本当はあたしも、喧嘩の原因の一つなんでしょう？　違う？」

さらに一步詰め寄って、春華が問う。胸を張って、自信満々の笑みを浮かべて。

あろう事か、小林くんは目を見開いた。愕然。驚愕。その反応が答えになった。

——小林のくせに川瀬春華に片思いするのは許せない。例えばそんなめちゃくちゃな理屈で喧嘩を売られて買ってしまった。それがまさか『裏』なわけ？ まさか、本当に？

「何で知って……あ、いや、それはそうだけど、でもそれはあいつの」

青ざめながらも言い訳——事実として認めたのだ、彼は——をしようにとする小林くんの台詞を遮って、パシン、と小気味のいい音がした。強烈な平手打ち。手を挙げたのはあたしじゃない、春華だ。呆然とする彼に、春華が酷薄な笑みを浮かべて言い放つ。

「小林くん、あなたのしてくれたことは感謝してるし、それに関して恩着せがましい態度を取らなかったのも偉いと思うけど、でも友海に近づくやり口はどうかと思うのよね。全然男らしくないじゃない。あたしの友達を落としてから次は本丸？ あたしの周囲の子を使ってあたしに自分のいい噂を吹き込んで、そうやってあたしを搦め手で落とすのがあんなのやり方なわけ？ それってちょっと酷いんじゃない？ 友海を何だと思ってるのよ」

つまり春華は、自分にお近づきするのに、どうして親友であるあたしを利用したのかと責めているのだ。あたしを前にそれを言えてしまえる春華も、充分ひどいと思うけど。

小林くんは叩かれた頬を押さえて、啞然とした表情で春華を見下ろしていた。

あたしは大きく溜め息を吐いた。……何も殴ることはないでしょうに。

まあね、あたしにだってプライドはある。恋のキューピット役を勝手に押しつけられるのは嫌なものだ。それもあたしに気があるような振りをして近づいてくる男の、恋愛成就の手伝いなんてもつとゴメンだ。予想はしていたけど、事実だと判明するとなんだか疲れた。徒労感だ。悩んだのは二日間、早くに事が判明してよかったと思うべきなんだろうか。

「行こう、友海。こんな奴に付き合う必要なんてないよ」

冷たく言い捨てて、春華があたしの腕を引っ張った。背を向けて思い出したのは、右腕をギブスした少年の涙。あれは恋に破れて泣いていたのだろうか？ でも、それならどうしてあれ以降、仁宮は嫌がらせを止めたんだろう。彼にやつつけられたわけでもないのに「待つて！ お願い待つて！ 仁宮と同じ勘違いしないでよ！」

小林くんの声に春華がぴたりと足を止めた。つられてあたしも足を止める。

追いかけてきた小林くんが、あたしの腕を掴んで、呻くようにして言った。

「それだけは勘弁してよ。やっと勇気を出して声をかけたつてのに、そんなバカな勘違いでフラれたんじゃ、浮かばれないよ……」

——は？ あたしは目を丸くした。意味分らん。でも春華は笑っていた。冷たさも怒りもない天使みたいな、悪戯好きの妖精みたいな可愛いらしい笑顔で。そして言った。

「て、ことはだ。小林くんの大本命、本当はあたしじゃなくて友海なのね？」

あたしはこれでもかってくらい目を見開いた。えええええっ！？ 何それ何それどういうことよ！？ 小林くんはその場にしゃがみ込んで、耳まで真っ赤にして言った。

「……そんなの、ここで言わせなくても良いじゃんかよ……」

「川瀬さんに、仁宮がちよっかい出していたのは知ってるよ。川瀬さんが言い返すの、よく見てたし。川瀬さんを庇って芦田さんが応戦するのも、よく見てたからね」

場所は美術室がある棟の外、非常階段の一階部分。美術室は次の選択授業のために移動してきた連中が集まってきたので、人気のない場所に避難したのだ。

小林くんは不機嫌な声で話し続ける。

「芦田さんもよくやるなって、初めは感心していたんだ。酷いこと言われたり突き飛ばされたりしても友達庇うの、凄いなって思っ

……でもいつだったか、二人にすげなくされる仁宮を見て笑ったのを、仁宮の仲間に見られたんだよね。嫌がらせはそれ以前からもされていたんだけど、きつとあれで、本格的に目を付けられたんだと思う……」

恥ずかしい場面を見られて笑われて、バカにされたと思ってカンカンになる仁宮。その怒りを弱い者虐めで解消しようとする彼の姿は、容易に想像ができた。

「僕が見ていたのは誰かなんて、そんなの関係なかったと思うよ。虐めの口実ができたことの方が重要でさ。でも僕にだって、プライドがあるからね。美術部が荒らされて、他の奴らにまで迷惑かけたのが信じられなくて、それで喧嘩吹っかけたんだ。……凄いでしょ、僕から喧嘩を売ったんだよ。——とにかく、僕が勝ったら川瀬さんらに手を出すな、一対一の男同士の勝負で決着をつけようってことになって。で、結果は知つての通り」

おどけて小林くんは両手を広げる。だけどあたしも春華も笑わなかった。

「あなたは右の腕の骨を折られて、仁宮は鼻の骨と歯を折られた」
口を挟んだのは春華。肩をすくめて、小林くんは一人で自嘲気味に笑った。握ったり開いたりするのは右の手。彼にとってあの喧嘩は、きつと負けたも同然だったのだろう。

「今でもね、絵を描こうとすると、仁宮が言ったことを思い出すんだ。『自分の大事なものを犠牲にする覚悟はあるか。もしあるのならお前の覚悟に免じて、川瀬から手を引いてやるよ』って。……右腕差し出したつもりはないんだ。でも結局折られたんだから同じことだよ。しかも今でも、絵筆握るのが怖いんだから情けないよ。染みついた恐怖って言うのかな。それ拭い取るために、らしくもなく空手部なんかに入ってみたんだけど、でもいくら強くなっても絵筆が握れなくちゃ、意味が無いんだよね……」

あたしの知らないところで、どれだけの葛藤があったのかあたしは知らない。

だけどあらしにだって、女の子にモテたいからなんていう軽薄な動機ではなく、小林くんにはもっと切実な願いや苦労や悩みがあって、自分と戦うということを知っていて、その結果が、今の小林くんなのだというくらい、よく分かる。想像できる。

明るい表情の、昔とは全然違う、今現在の小林くん。

そして彼は、今も戦っているのだ。

その戦いの一つが、美術部に入部することだったのだ。

それをあたしは邪推して勘違いして。あたしは自分が恥ずかしかった。

どうして彼があたしに声をかけたのかなんて、くだらないことをいつまでも気にして。自分のコンプレックスに拘って。それだって本当は、春華に嫉妬してのことだったのに。

「……助かったわよ、こっちは。ホントにあいつ、しつこかったもん」春華が言う。

「うん。……実際には、川瀬さんのためではなくて、芦田さんのためだったんだけどね」小林くんがあたしを見てにつこり笑った。

「尊敬してたんだ。僕はいじめられっ子で、勇気なんて全然なくてなのに芦田さんは友達のために頑張っていて。それに引き替え僕はあいつらから逃げ回っているだけで、そう思うと自分が情けなくて。……ずっと、気になっていたんだよ。芦田さんのことが」

すつくと小林くんが立ち上がる。階段を降りてくる。あたしは条件反射で一步後退。だけど一步だけで、何とかその場に踏みとどまった。

ここで逃げたらダメだって、あたしにも分かってる。でも本音は全力で逃亡したかった。その後に続く言葉を想像するのは簡単で、でも恋愛は苦手で。あたしは全然変わらない。

「やっぱり、僕じゃいやかな？ ……じゃあさ、せめて、友達からなんてどうかな？」

苦笑いを浮かべて小林くんが言う。その後ろにいる春華の、どうするの、と問いかける視線が突き刺さる。もちろん、友達も嫌だな

んてのは、さすがにおかしいだろう。でも彼の本心が違うのは分かってるんだ。そしていつか、いつかその日がやってくるかもしれないんだよ？——いや、きっとやって来るのだろう、答えを求められる日が。

……いやでもしかし。それまでに恋が冷めるかも知れないし。あたしは一条の光を見出した地獄の亡者のように、その光にすがりついた。それに春華も言ったじゃないか、これはリハビリだって、あたしの男嫌いを直すリハビリだって。

人生において、逃げるのが許されない場面というのがある。きっとそれが今なのだろう。性懲りもなく頭の中でぐるぐる言い訳をしながら、あたしは頭を下げてこう言った。

「……あたしでよければ、お願いします」

しかしながら気まずいことに、昼休み終了のチャイムが鳴って教室に帰る道すがら、二人がぼそぼそと内緒話をするのを、あたしはしつかり聞いてしまった。

「ね、小林くん。本当に友達からでいいの？ あの子、男嫌いだから安心とか思っているんでしょう、でもホント、あの子もの凄い奥手なのよ。大丈夫なの？」

「これから時間をかけて何とか。それに、本丸落とすには外堀からって言うでしょ。さっき言ってた例の搦め手で行きたいんで、川瀬さん、ご協力お願いできないかな？」

あたしが奥手なのは事実だけど、外堀って何？ 搦め手って何？ 「え、あれ？ 本気でやる気？ でもあたし、男を見る目ないって言われてるしなあ」

「どうしてそういう、意地の悪いことを言うのかな。わざわざ僕に告白させるような真似をしておいてさ。……僕の頬を叩いたの、あれ、わざとだったんでしょ？」

「……あ、バレてた？ だってあの子、小林くんがあたしに気があるって勘違いしてるみたいだったからさ。親友として、一発かまし

てあげないと思って思ったのよね」

全部聞こえてるぞ。もちろんあたしは聞いていないフリをしたけど。だってこんな会話、どうやって参加したらいいのか分からない。って言うか、参加なんかしたくもない。

春華があたしの背後で、呆れた声で呟いた。

「小林くんって、臆面もないことを平気で言うわね。人格変わったんじゃないかって、本当はそっちが本性なんじゃないの？」

「僕はもともと、素直な性格しているんですよ」

ぬけぬけと小林くんが言い放つ。だったらメチャメチャ、やばいんだけど。

だけどやっぱりあたしは、聞こえていないフリをするしかないのだった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124a/>

オトコギライ

2010年10月8日15時49分発行